
labyrinth of love

りさ0518

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

l a b y r i n t h o f l o v e

【Nコード】

N 4 3 3 1 F

【作者名】

りさ0518

【あらすじ】

純粹過ぎるほど純白な少女、理沙。男勝りな雅。2人が出会った学校。雅の秘密。秘密を知った理沙。…2人の前に立ちはだかる壁。そして―私は確かにあなたを裏切った。でもそれは…あなたに会いたい。もう一度会ってそして…ちゃんと話をしたい。嘘のようで本当の話、理沙が体験した真実のラブストーリー。

プロローグ

あなたに会いたい。

今すぐにでも会いに行きたい。

そしてちゃんと話したい。

あの時、私があなたを裏切った訳。

私の本当の気持ち。

あなたの気持ちも知りたい。

何も隠さずに本当のこと、話して欲しい。

そして…

あなたともう一度笑って語り合いたい。

私の夢。あなたの夢。

そして…

2人の未来も。

もうあなたは私の名前を呼んではくれないのですか？

私を…必要としてくれる日はこないのですか？

仕方ない。

私はあなたを裏切った。

それは事実だから。

でも、それでも私は…

1＊理沙

今、あなたは誰とどこで何をしていますか？

大学はとうですか？

医者には…なれそうですか？

2002年春。理沙12歳。

私立、南丘女子。

かなりの難関校といわれる、中高一貫式の女子校。

もともと対して頭がいいわけでもないのに、まぐれで入ってしまった理沙。

勉強は付いていけなくても、せめて部活だけは頑張ろうと思ってた。

でも、最初に選んだダンス部は先輩も厳しくて。

全然躍らせてくれないし、雑用ばっかだし。

敬語間違えると怒られるし。

とてもじゃないけど、やってられない！！！！

でも、南丘は1年間続けないと転部ができない。

「1年我慢したら転部しよう」

と思ってこっさり次の部活を探し始めた。

そのときにクラスメートの千佳がHRで

「今度演劇部が公演やるので見に来てください!」

と宣伝していた。

ま、参考までに。と思い見に行ってみた舞台。

とてもじゃないけど、学生演劇とは思えない。

そして私はいつしかこう思うようになっていた。

『私も出たい。』

そして…転部先を演劇部に決定。

3月のある日、私は先生から転部届けをもらい提出した。

そうして演劇部に入ってはみたものの、
いまいち馴染めない。

一緒に入ったちなつはとつくに友達も作ってメアドも交換して楽し
そうなのに…。

なんで…私だけ、馴染めないのかな？

ちなつもひどいよね…

一緒に入っただのに、自分に新しい友達ができたら私のことはもうど
うでもよくなっちゃうわけ？

ひどいよ…。

私は、先輩の

「あの子かわいそうだな」

という哀れみの視線と同学年の
「ちなつと一緒に入ってきた、ちなつにピタッとくっついた金魚の
糞」

くらいに見下した視線の間で日々暮らしていた。

…やっぱ、ダンス部にいればよかったのかな…。

と少し後悔もした。

部活の活動の方は…といえば、南丘の演劇部の公演は年4回。

4月に新入生歓迎のための公演。

7月には夏の公演。

10月に文化祭で公演。

1月に冬の公演。

7月の公演は新入生の初舞台も兼ねている。

つまり、私とちなつの初舞台。

裏方は先輩がやってくれるから、

中2は全員キャストで出る予定。

立ち稽古に2ヶ月はかかるから、新入生は5月までに一通りの基礎
練習をマスターしなくてはならないというハードスケジュール。

発声に、滑舌に、柔軟に…。

つまり、今は人間関係を気にしている暇はないってこと。

今はひたすら基礎練習に集中するしかない！

先輩に習って基礎練習をする。

でも…

ちなつは同学年から色々アドバイスしてもらってるのに、私には誰

もアドバイスしてくれない…。

やっぱり寂しいな…。

そんな日が続いて…。

4月も半ばを過ぎて発声もそこそこできるようになったある日…。

私は千佳から思わぬ誘いを受けた。

「今度一緒にカラオケ行かない？」

え！！？行つていいの？？

ちよつと嬉しかった。

千佳は誰よりも気を使う子だから、もしかしたら、私が寂しそうにしているのに気づいていた。

だから誘ってくれたのかも知れない。

でも、それでもとても嬉しかった。

ゴールデンウィークの5月4日に約束をした。

場所は朝10：00渋谷の八チ公口前。

2＊雅

愛しき理沙へ。

お前は今どこで何をしてるんですか？

友達はできたんですか？

お前、友達作るの下手だから心配だよ。

お前に会いたい。

お前がいいと言ってくれるなら、どこへでも会いに行きたい。

でも、今の俺には…そんなことできない。

お前の連絡先すら知らない俺は…お前に何もしてやれない。

桜井雅。

男みたいな名前だけど一応女です。

声も低いし、髪型はショートだし、服といえば、シママラで男性用のものを買ってきて着る。

筋力だつて、そこら辺のナヨツとした男よりよっぽどある。

昔から街を歩けば男だと間違えられる。

まあ、それが俺の運命なんだろうと思ってきた。

中学は、そんな俺を心配した母の希望で女子校に入学。

しかし、女の子の話ってのはいまいち分らない。

嵐の松本君がかっこいいだの、どこの香水がいい匂いだの…。とてもじゃないけど、ついていけない。

部活はやるって決めてたから、とりあえず、バスケット部に体験入部してみたけど、足が遅い俺には向かないみたいで…。運動部は片っ端からあたったけど、いまいち「これだ！」と言えるものがない。

そのとき―俺は出会ってしまった。

演劇部。

ここなら俺もやっていける。

女子校の演劇部は男役も女がやる。

つまり、俺にはもってこいなところだった。

元々男っぽい俺も、ここでなら居場所を見つけられそうな気がした。

そして入部。

同学年は3人。

ひとときわ目立ってにぎやかな子。千佳。

こいつならやっていけるか？

と思った。

個性的で、オヤジギャグばっか言ってるようなキャラで…。

いや、正直にいうなら、残りの2人がどうしようもなく気が合わなさそうだったから千佳とつるんでただけ。

百合は、おとなしいお嬢様キャラだからとてもじゃないけど付き合えない。

あとは…春香は「皆のお母さん」とか自称して仕切ろうとするから苦手。

春香と百合は2人で気が合ってそうだったから、じゃあ俺は千佳とつるむか…みたい。

で、1年間は特に何事もなく平凡な演劇部ライフを送った。

でも、いつしか俺は、千佳を嫌うようになっていた。
というか、千佳はなんだかんだ言って自分勝手だ。

一人っ子だからなんだろうか？

マザコンだし、何かやってらんねえ！

でも、残りの2人とも付き合えねえ！

この際部活を辞めてやろうか？

そう思い始めた中2の春。

何の予兆もなく、お前は俺の前にやってきた――
真っ白で愛しいお前が。

3＊理沙

あなたは前から医者になるのが夢だと言っていました。
将来のことなんて考えたことがほとんどなかった私にとって、
そんなあなたの姿は輝いて見えました。

でも…、成績だけは私の良かったよね（笑）

大学受験。あなたはきっと必死になって勉強したんでしょう。
私はそんなあなたの姿を知らない。

でも、本当は見ていたかった。

あなたの姿を――

ずっと隣にいたかったのに…。

――渋谷のカラオケボックス。

「えっ、またキンキ入れるの？」

「だって、光一くんかつこいいんだもん！！理沙、剛くんのパ
ート歌ってよ。」

さつきから千佳はk i n k i k i d sしか入れない。

相当なファンらしい。この間のコンサートにも行ったとか。

私とは言え…無難にあゆとかY U Iとかが好きでよく聞いている。
ジャニーズなら…強いて言えば錦戸亮くんが好き…かな。

結局、千佳は3時間のカラオケでキンキしか歌わなかった。

そして入った喫茶店。

演劇部の子と話をするなんてほとんど初めてだったからちよつと緊張したけど、千佳が

「理沙とおしゃべりしたいから。」

と言って半ば強引に連れてこられた。

千佳は何かと気が利く子だとは噂で聞いていたが、浮いている私をわざわざ誘ってくれるなんて…

その日私は千佳をありがたい仏像でも眺めるような目で見ていた。別に、千佳が仏像に似てたとかそうゆうことじゃなくて、ただそれくらいありがたかった。

あ、でも千佳は肌が黒い。本人も気にしてるみたいだから言わないけど、ぶつちやけ黒人っぽい！！？

入った喫茶店で、とりあえずアイスコーヒーを注文して席に着く。

何を話していいかわからずにおどおどしていると、

千佳の方から話題を振ってくれた。

「どう？基礎練習。上手くいきそう？」

「う、うん。」

せつかく千佳が話してくれてるのになかなか上手く反応できない自分が少しもどかしかった。

「理沙はさ、何て言うか…もっと積極的に質問とかしないと、どんどん置いていかれちゃうよ？」

「あ、でも、私が質問したら迷惑かな…って。」

あ、少し本音が出た。

「えーっ。そんなことないって。皆さ、ホントは理沙と話したい訳。でも、どうやって話しかけていいか分かんなくて困ってるんだよ。」

「え、そうなの！！？？」

嫌われてないって分かって少し元気が出た。

「この間さ、雅と話してたんだけど、理沙はさ、異空間を浮遊してるようなオーラあるじゃん？あ、不思議ちゃんってやつ？だから何か話かけにくいんだよ。」

え、私って不思議ちゃんなの？と、軽くショックを受けたが、今はそんなことはどうでもいい。

この際、千佳と仲良くなれば…と思い

「ふん。あ、千佳！雅ってどんな子なの？」

おっ、何か話が膨らみそうだな

「見れば分かると思うけど、かなり男っぽいでしょ？性格もかなり。何て言うか…ちょっとキザっぽい？ホストっぽいって言うか…。でも、本当はすごくマジメな子。理沙は雅と話したことないの？」

うわ、、図星。でもここは正直に…

「うん…何か演劇部の子となかなか打ち解けられなくて…話したことはない。」

あっちゃ。言っちゃったよ、

「えー、せつかなのにね。」

と話がひと段落したところで、千佳は『彼氏と約束がある』と言って帰ってしまった。

でもー明日から何か上手くいきそうな気がした。
明日が楽しみだ♪

4＊雅

本当はお前と同じ大学に行きたかった。

でも、俺は医者になるって決めてたから、別々の大学に行った。

お前は可愛いから、もしかしたらもう彼氏とか作ったりして幸せにやってるんだろうか？

そうしたら俺は…もう必要ないんだろうか？

あんなに頼ってくれたのに。

あんなに必要としてくれたのに。

あなたはもう俺に頼ってはくれないんですか？

あなたはもう俺を必要としてはくれないのですか？

理沙が演劇部に入ってきて一週間が経った。

千佳から離れたい俺にとっては最高の『逃げ場』になるような気がした。

なんとなく学年内でも浮いてたし。友達いなそうだし。

理沙からはどことなく寂しげな雰囲気を感じた。

俺はずっと話しかけたかったけど、いまいちタイミングを掴むことができずにいた。

かつこ悪いな…、俺。

そういえば、千佳は去年理沙と同じクラスだったんだっけ？
ちよっと探りを入れてみることにした。

「清水さんってさ、どんなこなん？」

あえての『さん』付け。いきなり理沙とか言ったら何か不自然な気がして。

「本当は明るい子だよ。ただ、ちょっとバカってか天然？不思議ちゃんって感じ。」

「へー。そうなんだ。何か話しかけてあげたいんだけどどうやっていいか分かんなくない？」

「ま、そうだよな。じゃあさ、ウチ、去年同じクラスだったし、一緒にカラオケでも行ってこようかな。」

と言い残し、千佳は早速理沙のところへカラオケに誘いに行った。

『不思議ちゃん』か。

あんま得意じゃないかもな…。

と思い少しため息をついた俺。

でも、千佳は何かウザいし、やっぱ『逃げ場』には最適かもしれない。

『不思議ちゃん』なら何も気づかずに仲良くしてくれそうだし。

汚いな。俺。

5＊出会い／理沙

次の日から言えば、私は千佳にベッタリだった。

初めてできた演劇部の友達。私は嬉しくて嬉しくて…。

千佳は元々学年のリーダー的存在だったから、自然と他の子とも話す機会が増えて…。

全てが上手くいきそうだった。

そして、もともと千佳と仲が良かった雅と3人でお弁当を食べたり、カラオケに行ったり。

毎日が楽しくて…。

そんなある日、雅からの初メール。

『明日さ、話したいことあるんだけど時間ある？』

これって呼び出しだよね…？

次の日、

（何か、悪いことしちゃったかな…？）

と少し不安に思いながらも、待ち合わせた場所へ行く。

少し早めに着くように行っただけで、既に雅は私を待っていた。

「ごめんね。待ってたでしょ？」

「どっか行こうか？あ、マックでいい？おごるから。」

いつもと同じでクールな雅に連れられて、駅前のマックに行った。

私は、友達におごってもらうなんて初めてだから、なんだか申し訳なくて。

そして…沈黙。

なんとなく気まずい空気が流れて…

仕方ないから私から話することにした。

「話って何？」

「理沙はさ、前はダンス部だったんだよね？どうして演劇部なんかに入ろうと思ったの？」

「んーと、千佳に誘われて見に行った舞台で感動しちゃって…」

本当は…ちょっと違うんだけどね。

「あ、そうだったんだ。で？どう？部活楽しい？」

「うん！楽しいよ。」

「そっか…。理沙はさ、千佳のことどう思ってるの？」

雅はいつになく真剣な表情で聞いてきた。

その時の私は千佳にはすごく感謝してたし、仲良かったし。

「すごく…優しくていい子だね？」

うん。これが正直な話。

「そっか…。」

そう言いながら、雅はため息をついた。

私にはため息の理由が分からなかったけど。

ここは話題を変えなきゃ！

「雅ってさー、男っぽいよね？」

これは、うまい具合に話が反れそうだ！そう思ったけど。
雅は私が話を反らそうとしてることを見抜いてたみたいで。

「うん。まあね。千佳ってさー、何か威張ってるような気がして。
最近ウザいんだけど。」

えっ、ここの展開ですか？
いきなり悪口とか言っちゃうわけ？

「まあ…ウチの学年のさ、リーダーだよな」

と、話を丸く収めようとしたら…雅はそれを遮るように…

「俺さ、嫌いなんだ。そうゆつの。だから…何ていうか…ごめん。
いきなりこんな話して。でも…お前とは何かうまくやっていけそ
うな気がするよ。」

そう言い残して雅はマックを後にした。

雅が去った後には…

呆気にとられた私が1人ぽつんと座っていた。

6＊出会い／雅

千佳は昨日、理沙とカラオケに行ったらしい。

どうせアイツのことだからk i n k i ばっか歌ったんだろうけど。
アイツ、リアルにうぜえ。

そつえば、昨晚、千佳から報告メールが来た。

『やっぱさ、理沙、寂しかったみたい。明日から仲良くしてあげようよ』

何か、いい感じじゃないですか？

明日から理沙も一緒だって。何か。テンション高いんですけど。

とウキウキして学校に来た。

俺にしては珍しい。

その日から俺は千佳と理沙と

そして、もともと千佳と仲が良かった雅と3人でお弁当を食べたり、カラオケに行ったり。

最初は単純すぎて、馬鹿すぎる理沙についていけないって思ったけど、

だんだん慣れてくるとむしろ単純で馬鹿なところが理沙の魅力だと思ふようになっていた。

千佳は相変わらずウザくてウザくて…

千佳と3人と言うよりは理沙と2人でいたかった。

千佳がそれくらい嫌いだった。

俺は決めた。

やっぱり千佳は嫌いだ。

そして…理沙と2人でいたい。

その方がずっと楽しいと思ったから。

そして、アドレスだけ聞いて連絡したことのない理沙のケータイにメールを送る。

『明日さ、話したいことあるんだけど時間ある?』

いきなりこんなこと言われたらびっくりするよな、
と思いつつも送信ボタンを押してしまったらもう遅い。

だけど、いきなり呼び出して「千佳がウザい」なんて言ったら理沙はびっくりするよな、
嫌われないといいけど…。

次の日、

呼び出した側が遅刻なんてかつこ悪すぎるからと思って早く待ち合わせ場所へと向かった。

だけど、気合入れすぎて30分も早く着いちゃっし…

「ごめんね。待ったでしょ?」

あ、理沙だ。

来てくれたんだ。

本当に来てくれたんだ。

『来てくれた』っていう事実が嬉しかった。

「どっか行こうか？あ、マックでいい？おごるから。」

ちよつと太っ腹なことを言ってみる。

理沙の機嫌取りじゃないけど、呼び出したんだし、これくらいはしてあげてもいいかな、と思った。

とりあえず、いつものチーズバーガーのセットを頼んで席に着く。俺がどうやって話を切り出しているか分からずにおどおどしている…

理沙の方から話を始めてくれた。

「話って何？」

いきなり…本題に入るわけにはいかないよな？

じゃあとりあえず…

「理沙はさ、前はダンス部だったんだよね？どうして演劇部なんかに入ろうと思ったの？」

我ながら自然な流れを作れたと思う。

「んーと、千佳に誘われて見に行った舞台で感動しちゃって…」

「あ、そうだったんだ。で？どう？部活楽しい？」

おっ、なんかいい感じ♪

「うん！楽しいよ。」

そろそろ…いいですかね？

早めに切り出さないと…話損ねちゃう気がするし。

「そっか…。理沙はさ、千佳のことどう思ってるの?」

言っちゃった。

ちよっと単刀直入すぎたな。

理沙がビビッてるのが目に見えて分かった。

「すごく…優しくていい子だよね?」

…やっぱ無難なことしか答えないよな。

「そっか…。」

自然とため息がこぼれた。

「雅ってさー、男っぽいよね?」

うわっつ、話を反らされる!!

このままじゃまるで話せじまいじゃないか!!
と思い、少し強引に話を戻す。

「うん。まあね。千佳ってさー、何か威張ってるような気がして
最近ウザいんだけど。」

絶対理沙に引かれるわ…思った。

「まあ…ウチの学年のさ、リーダーだよね」

理沙は困ったような顔でそう言った。

理沙の困った顔を見た俺は何だか申し訳なくて…

でも、考えるよりも先に言葉が出ていた。

「俺さ、嫌いなんだ。そうゆうの。だから…何ていうか…ごめん。いきなりこんな話して。でも…お前とは何かうまくやっていけそうなのがするよ。」

あ、あー、

もう話が続かないと思った俺は、何だか申し訳ない気持ちと、この後理沙との間に気まずい空気を恐れる気持ちに襲われ…

気づいたときには席を立っていた。

理沙、マジごめんな。

7*約束〜理沙

次の日、私は昨日のことが気になって教室でボーッとしていた。

クラスメートの春名や美香はそんな私を心配してくれたけど、どうしても話す気になれなくて…

千佳も教室に遊びに来たけど、何か昨日のことが申し訳なくて…冷たくしか接することができなくて。

千佳はそんな私をつまらないって思ったのか、サッサとどこかへ行ってしまった。

私は寂しかったけど、追いかける気にもなれずに…。

お昼休みも中ごろを過ぎた頃、雅が遊びに来た。

私は昨日のことを思い出して、雅と目をあわせられずにいたけど、

雅はそんなのお構いなしに話かけてきた。

「ねえ？今暇でしょ？どっか遊びに行こうよ」

私が答えるよりも先に雅は私の手を引っ張って屋上へ。

私はこれからどうなるのか全く見当が着かなくておどおどしていた。

「昨日の話、乗ってくれる？」

「え…？千佳を苛めるってこと？」

「そういう訳じゃないけど、これからは2人でツルもつってこと。」

あ、そうゆうことだったのか。

でも…今ここで断ったら雅に嫌われちゃうし、でも、千佳にはなんだか申し訳ないし。

でも、雅に嫌われたら千佳からも嫌われるかもしれない。

つまり、私が友達を失わないためには、『雅の話に乗る』。それしかなかった。

「う、うん。乗ってもいいよ?」

「え?マジ?じゃあ、今日の放課後から作戦実行!

やっぱお前とはうまくやっていけそうだよ。」

そこまで話したら、雅は『次の時間に小テストがあるから』と言い残し、教室に帰ってしまった。

何か一方的に話を押し付けられてるって感じ。

正直あんまい気持ちじゃなかったけど、これでとりあえず一人ぼっちになる心配はないんだって思うとなんだか嬉しくなってきた。千佳には申し訳ないけど。

その日から、私はずっと雅と一緒にだった。

クラスこそ違うものの、朝の時間や休み時間は必ずお互いの教室を行き来し合って一緒にいたし、放課後だつてずっと一緒にだった。

兄弟よりも仲がいくらいだった。

雅は私の生活の一部になっていた。

ちよつと脳みその足りない私に取って雅は魅力的だった。

放課後もずっとおしゃべりして…部活のことだつて色々教えてもらった。

そして、いよいよ、私の初舞台のキャストを決める時期がやってきた。

もちろん、初舞台だから主役とかは期待できないけど…

キャスト発表。

私がもらった役は劇の中ではギャグ的な面白い存在で…

そして、いつも一緒にギャグをかましてる相方がいた。
私がボケで相手がツッコミ。その相手役が百合だった。

そして、部活中は百合と自然にツルむようになった。
もちろん、それ以外のときは雅と一緒にだったけど。

今思うと、これが全ての始まりだったのかもしれないね。
あの時、あの屋上での出来事がなかったら、

きっと2人の運命は違った。

それが良い方向にだったのか悪い方向になのかは分からない。

でも、あの出来事がなかったら――

私がこんな気持ちになる日は来なかった。

そのことだけは、はっきりと分かります。

8*約束〜雅

次の日、俺は昨日の事実がある以上、理沙には合わせる顔がない。千佳は、いつもの調子で教室来るし…まじうぜえ。

適当に千佳を追い出して、俺はずっと考えてた。

『これから理沙とどうしよう…』

と、会いに行きたかったけど、なかなかその勇気も出ずに…。

昼休み、やっぱり、理沙と話したい。

だから、理沙の教室へ行った。

「ねえ？今暇でしょ？どっか遊びに行こうよ」

俺は、理沙がビビッてるのに気づきながらもそんなのお構いなしに、理沙の手を引っ張って屋上へ行った。

「昨日の話、乗ってくれる？」

いきなりすぎたかな…。

理沙が明らかにあせってる。

「え…？千佳を苛めるってこと？」

「そういう訳じゃないけど、これからは2人でツルもうってこと。」

理沙はこんな俺見てどう思うんだろう。ただのウザい奴って思われ
ても仕方ないと思った。

そして、しばらく考えてから…理沙が出した答え。

「う、うん。乗ってもいいよ？」

マジですか！！！！？？

めっちゃ嬉しいんですけど。

「え？マジ？じゃあ、今日の放課後から作戦実行！

やっぱお前とはうまくやっていけそうだよ。」

そこまで言くと、俺は次になんて言えばいいのか分からなくなって、
ありもしないのに『小テストがある』と言って教室へ帰った。
めちやくちゃ嬉しかった。

理沙が、これから俺と一緒にいてくれる。

そして、キャスト発表。俺はいつも通りの男役。理沙も男役。

その時の俺にとって、理沙は『俺を一人ぼっちにしないための道具』
でしかなかった。

俺が一人になって先輩から『あの子寂しい子』って思われないよう
にするための『道具』。

別に理沙が嫌いだったわけじゃない。

『千佳が最悪だから理沙にした』ってのが正直な話。

でも…そんな俺に転機が訪れたのは…夏休み…だった。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n4331f/>

labyrinth of love

2010年10月12日03時05分発行